



梅の花の咲く処

試し読み版

夢酔藤山

序 三田谷

この日は、最愛の妻・妙の弔いだ。

静々と、葬送の行列が少し萎れた夏草を踏み締めて、多摩川沿いを進んで行く。街道に立つ百姓たちも、眩しい陽射しに目を細めながら、行列に手を合わせじつと見守っていた。

妙は五〇を越してから、急に体調を崩し、床に就くことが多くなつた。

「大事にせえよ」

と夫から労われつつも、昨夜、何の前触れもなく眠るように息を引き取ってしまった。彼女の唐突な死は、三田谷と呼ばれる多摩川流域の人々を大いに悲しませた。

妙は柚保を統治する勝沼城主・三田弾正少弼綱秀の正室である。

生前、彼女の質素にして慎ましやかな人柄を、一族郎党は心から敬慕して止まなかつた。彼女に相応

しい、厳かな儀礼を簡略した慎ましい葬礼を、皆は考えていた。

妙の死したその夜。

「梅の薫る里を見下ろして、皆を待ちながら瞑りた
い……」

一族全ての夢枕に、彼女は立った。

生前華やぐことのなかつた妙なりの

「これは最期の願いであろうよ」

と、三田家の者たちはこの想いを汲むこととした。

妙の亡骸は三田村の福禪寺へ葬られる事となつた。多摩川を隔てて、梅の花の咲く里が眺望できる、というのが理由である。

朝早く、妙の遺骸は霞川の河原で茶毘に伏された。質素な骨壺に納められた遺骨を、三田弾正少弼綱秀は咽び泣きながら抱きしめていた。

彼には年若い側室が多くいたが、共に苦労を重ねてきた妙は特別にな存在だつた。それだけに

「さてもよき妻を失つた。残された日々も寂しい限りよ」

と、ただただ項垂れるばかりであつた。

葬送行列の先頭を肅々と進む彼を気遣うように、

嫡男の三田重太郎が、寄添うようにこれに続いた。

福禪寺への街道は、北に永山丘陵から連なる山々を仰ぎ、南に河段段丘で深く反れた多摩川の狭間を望む。宮ノ平辺りからは谷のように深い底に瀬音が響く。駆け抜ける風の匂いも、このあたりから一変する。旧暦八月は新暦に直すと九月の初旬、ほのかな秋の気配が山里に漂い始めていた。

街道沿いには見送るべく、軍装に身を固めた兵たちが整然と並んでいた。付近には三田の山城になる楯の城・柵形山城がある。城將の多くは、生前の妙に可愛がられた者たちだ。彼らは三田弾正の胸に抱かれた骨壺を、泪に濡れた瞳で、食い入るように見つめていた。

「御方さま……」

と誰かが呟くと、辺りからは嗚咽や啜り泣きが零れ、三田弾正の涙腺もいよいよ弛んできた。

やがて街道は、ほぼ直線の様相を示す。そこには神石を祀る祠があり、土地の者はそこを「石神明神さま」と崇め敬っていた。その石神前で一行を出迎えるひとりの僧侶がいた。

福禪寺五世任職・太占。

夢枕の話聞き

「ならば当寺へ」

と進み出た。太占の言動は飾らぬものだが、それゆえに遠慮もなく、多くの人から慕われた。三田家とも古くから親交が厚く、勝沼城へも出入りが許されている。

「大殿」

重太郎は父に声を掛けた。骨壺を抱きしめたまま、三田弾正は虚ろな伏し目を面前に傾けた。

「まだまだ暑いのに、御苦労にござるなあ」

太占和尚は大声を張り上げながら、深々と頭を下げた。泣き笑いのような表情で、三田弾正は静かに頭を下げた。

「和尚、これへ」

重臣・谷合太郎久信が鞍をつけた馬を曳いて、太占に勧めた。が、太占は大きく頭を振った。

「当寺はすぐじゃ。弾正殿の脇を歩かせて貰おう」
そういつて歩き始めた。

福禪寺は後年、徳川時代の朱印発給の際に誤記さ

れて以来、《海禪寺》と呼ばれる。分かり易くするため、以後は海禪寺と称す。

海禪寺山門前には整然と迎える辛垣山城の城兵がいた。

海禪寺の真裏に聳える急峻が辛垣山、その頂を本丸とし、全山すべてが要塞とされたこの城は最後の砦である。

感極まる三田弾正は喉が掠れて言葉にならない。

傍らの太占和尚がすかさず

「諸将、まことに大儀なり！」

と叫んだ。

葬送行列は粛々と山門を潜っていった。

この年——永祿三年（1560）、天下は大きく動いていた。

桶狭間で織田信長が今川義元を討ち取り、華々しく天下に躍り出た。殺伐とした匂いを遠くに嗅ぎながらも、三田谷は静けさに包まれていた。多摩川のせせらぎが響くこの地に棲む人々は、戦国を身近に感じつつも、穏やかな時間のなかで

「当たり前の日常」

を重ねながら、質素に、それでも朗らかに、生活を営んできた。

やがて迫り来る、巨大な歴史のうねりと足音。そのことを誰が予見できたろうか。関東はただひとつ、北条に附くか否か。ただそれだけのことで、名もなき小豪族たちは右往左往しながら血を流し、命を削る日々だった。

卷 上杉再臨

一

杣保は広大にして貴重な森林資源を蓄える肥沃な地である。東は草花丘陵を先端とし、西は御岳山の尾根に連なる山脈部、いわゆる多摩川流域一帯を指す。それだけではない。北は成木を超えて、その影響は高麗郡にまで及ぶ。

杣とは、国府に供する山林資源の地域を指す。国府とは、武蔵国府や国分寺に相当する。保は行政單位のひとつ。すなわち杣も保も、律令国家の時代に興った名称ということになる。ゆえにこの地の正しい名は〈武蔵国杣保〉と称する。

三田弾正少弼綱秀

上杉家と小田原北条家の間にあって、群雄割拠の

世に杣保を統べる豪族武士団の棟梁である。三田氏は古来より、平将門の後胤を自負してきた。『吾妻鏡』や『曾我物語』に鎌倉御家人三田氏の記述があることから、源頼朝が幕府を開いた頃からこの地を支配していた古き一族の末裔であることは疑いない。

武蔵多摩郡は多摩川を挟んで東を多東郡、西を多西郡と大別される。多西郡杣保三田谷は、武蔵南部の軍事的要衝。関東制覇を狙う小田原北条氏は、多摩川とともにこの地の重要性を理解していた。

三田氏は関東管領・上杉氏の被官だった。最後の関東管領・上杉兵部少輔憲政は〈河越夜戦〉に敗れ、遠く越後まで逃げたと聞く。上杉一族の失墜で迷惑するのは、その被官たちである。多西郡の者は鎌倉府の支配下であり関東管領家に属した。それも、今は昔のこと。

相模・伊豆・武蔵の一部は、北条氏の支配となつた。

多西郡も例外ではない。この状況を、この地の豪族たちは堪え忍ぶしかなかった。多西郡滝山城にあつて広域に睨みを利かせていたのは、武蔵守護代の大石氏だ。この一族と歴代の三田氏が、両輪の如く

多摩地方に上杉の秩序を支えてきた。多摩川・秋川筋に親上杉派の豪族が多いのは、大石氏の影響である。北条氏康が大石氏へ婿養子を押しつけてきたのは、円滑な従属化を多摩へ拡大するためだ

多勢に無勢、大石源左衛門定久は戦って滅ぶよりも生きる道を選択した。定久の嫡男・綱周は人質に取られ、代わりの婿養子、氏康三男・藤菊丸が送り込まれた。ゆくゆくは大石家をそっくり北条の血で塗り替えようというものだ。

大石定久は憤懣やるせなく隠居の道強いられ、藤菊丸を補佐するために北条家から家臣団が送り込まれ、結果として大石家臣団も居場所を失った。

城入りと同時に、藤菊丸はその名を

「大石源三氏明」

とあらため、定久の娘・比佐を正室に据えた。

定久は剃髪し入道道俊と号し、戸倉山城に隠居して城主・小宮左衛門頭綱明の庇護を頼った。大石氏が屈すると、多摩の小豪族は挙って北条への臣従を誓った。延命のためには選択肢などない。三田弾正も苦渋の選択を強いられた。

多摩地方の情勢は、緊迫した情勢のなかにあった。

三田氏を取巻く情勢は、決して穏やかなものではない。妙の死は、三田弾正にとって厳しい時期の出来事だった。

「大殿、大殿。いつものようになさりませ、大殿」

勝沼城では三田弾正に、最も年若い側室・幸が睦事をせがんでいる。齢七〇を越えてなお凛々しい彼は、妙の亡きあとはその兆候さえ萎えて久しい。初七日も終えてすっかり惰気している三田弾正をなんとか奮い立たせようと、三十路の肢体を薫らせながら、幸は執拗に求めた。

「大殿、しつかりなさいませ。このままでは、わたしもいい恥でございます」

しかし幸の淫奔な責めにも心ここにあらず、遂に三田弾正は「男」を示唆することが適わなかった。

三田弾正にとつて亡き妙はただの伴侶ではない。

良き日も悪しき日も、互いに支え合つて乗り切った、かけがえのない人生の朋である。どちらが欠けても成立しない、二人で一人のような、そんな関係であった。蓄積した一人の歴史は、若女の躰ひとつで易々と埋められるものではない。そんなことは家臣一同

も側室一同も、何より幸自身がよく弁えていた。全く恥を搔いたと憤慨してみせながらも、すっかり精気の抜けた三田弾正の身を幸は案じていたし、その行く末を思わずにはいられなかった。

重臣・谷合太郎久信は、幸自らの口から「そのこと」を聞いて、大きく溜息を就いた。

「さてもさても、大殿はすっかりと。せめて、立ち直るきつかけさえあれば」

北条氏の支配下では心安んじることが出来ない。

三田家の進むべき道は迷走のなかにあるが、頼みの舵取りがこれでは、何とも心許ない。

若手家臣団のなかからは

「大殿もいよいよ御隠居召されるか」

という声さえ囁かれた。このことは自然の道理である。若手家臣団は嫡男・重太郎の家督相続を望んだ。が、老いた重臣たちはそれを危惧している。

三田重太郎は当年一八歳。

妙は子を成すことが叶わず、御家の将来を憂いて側室を奨めた。最初に生まれたのが重太郎である。

五〇を過ぎて初めて人の子の親になった三田弾正は、その後立て続けに側室を孕ませた。

重太郎はまだ元服もしていない。初陣も知らぬ。

いきなり家督を継がせるのは如何なものかと、老臣たちが洩るのも道理であった。さりとて三田弾正がいつまでも惚けたままでは、まとまりを欠く。

谷合久信は譜代ではない。年も若い。弾正の抜擢で重臣に引き立てられた男だ。それゆえ若手家臣団の云うことも、老臣たちの懸念も、双方の立場で理解していた。

三田の家督をどうすべきかと、重臣が勝沼城に集まった。

「いつまでも若殿の未熟を棚上げには出来ませぬぞ。こうしている間にも北条の奴らが……大石殿のように、養子当主を抱えたくはありません。重太郎様を育てればいいんじゃないか」

この発言は双方を納得させた。若手は内心歓喜し、老臣もただただ呻いて現実を見つめようとした。重太郎はじつとじつと腕を組んでいた。

（老臣たちが洩るのは、偏に己が未熟な証なのだろうか）

ここで、重太郎は口を開いた。

「世継ぎならば武芸は勿論、内政を知らねばならぬ。

皆を頼りにしているが、頼られる当主にならねばとも思う。頭を下げよう。当主として頼られる男になりたい」

潔いことだ。

すると、老臣たちも重太郎を認めねばと、考えを改めた。

「父の任は重責、儂は見ての通り未熟者。さりとて憂いてばかりでは埒が明かない。家督はあとでもいい、父の陣代という形から始めたらどうか。まずは皆から学ぶこと。実を取るのが必要だ」

と、重太郎は断言した。重太郎の未熟は経験不足だけであり、血筋から、後継者として異存はない。いまは修練の時期であり、いつか花の咲くときも来る、そう割り切ればよいのだ。

重太郎を陣代にと、意見がまとまった、そのときである。

「御注進あり！」

取次ぎの者が駆け込んだ。戸倉山城の大石源左衛門入道道俊からの使いだ。重臣たちは顔を見合させた。大石入道となれば無下な対応は出来ぬ。さりとて三田弾正に対応は出来ない。陣代である以上、

これは重太郎の役目だ。

「儂が、会おう」

と、重太郎は答えた。重臣・神田与五右衛門正友と谷合久信とも同席した。

二ノ曲輪控えの間に戸倉山城の使者はいた。慇懃な素振りですぐこれに応じた重太郎たちは、そのもたらした報せの

「途方もない話」

に、仰天した。

「大石はこれを機に北条から決別します」

「そんなこと、本当に」

「やります」

「しかし」

大石入道の身が危ないのではあるまいか。

「されば、三田殿の御意向を伺いたいのです」

使者の問いに重太郎は、即答は出来ぬと断じた。

「成る程、それも道理。ならばそのこと、主君・入道様にお伝え申す」

丁重に使者を送り返したのち、重太郎は事の是非を二人に伺った。神田正友も谷合久信も返事に窮した。

「本気かな」

「わざわざ、こんなところまで来るのに、嘘はないだろう」

「北条の間者が揺さぶって、反応を窺うという疑いだってある」

「どちらにせよ、このことは三田弾正の耳に入れねばなるまい。」

重太郎は三田弾正のいる四ノ曲輪屋敷の居間へと赴いた。

三田弾正は幸の膝に頭を乗せたまま、ぼんやりと翹雲を眺めている。重太郎に気がついた幸は、膝をゆすった。三田弾正は身動きもしない。

「幸殿、そのままでよい。父上にはこのまま聞いて貰う」

傍らに腰を下ろした重太郎は、声を潜めながら「先程、戸倉山の大石入道殿の使者が参りました」

「……うむ」

「関東管領上杉公が凱旋なさいます」

三田弾正はカッと、眼を見開いた。暫くそのまま動こうとはしなかった。

「今一度、申せ」

乾いた声が響いた。

「大石一党は北条と決別する由。三田を誘いに参られた御様子にて……」

これまで虚ろだった三田弾正の瞳が、みるみる輝きを取り戻した。

「いま一度、申してみよ」

「越後に追われし関東管領上杉公、関東凱旋の御注進これあり」

途端、三田弾正は跳ね起きた。

「皆を呼べ、一刻以内に本丸大広間へ重臣を招集せよ」

「皆は、既に」

本丸に集めたままだった。

「そうか、ならば重太郎。ついて参れ」

消沈した日々が嘘のように、三田弾正は力強い足取りで歩き出した。

北条氏の支配下に組込まれて以来、三田弾正少弼綱秀の心はずつと鬱屈していた。関東管領上杉氏を恋いみて止まなかった。妙の死が、それに止めを刺した。三田弾正の武将としての一生は、ここで終わっても不思議ではなかった。

しかしここにいるのは、最愛の妻を失い途方に暮れていた老夫ではない。秩序と名誉を重んじ坂東武者の血を滾らせる、ひとりの老将である。

大広間に現われた三田弾正を見て、家臣団はどよめいた。その表情は往年のギラギラした武将の貫禄が漲っている。

「心配させたな。上杉公が関東に戻られる。我らの取るべき道はひとつしかない」

三田弾正の言葉に、家臣団は言葉を失った。その号令こそ、彼らの望む言葉であった。

「我ら三田の軍勢は上杉公の先陣に加わり、まずは武蔵国から北条の輩を撃退する。皆も心せよ」

その熱い言葉は、三田弾正の完全復活を意味し、それにも勝る関東管領凱旋の報せに、家臣団の気は昂った。

その最中にも戸倉山城からは第二の使いがきた。今度は三田弾正と重太郎が応対した。

「上杉公凱旋にあたり、貴人随行これあり」

前関白・近衛前嗣が、関東復帰の軍勢に隨身するといふのだ。これは関東管領の権威が色褪せぬものと宣言する朗報だ。

しかも

「上杉公本陣の露払いは、越後守護代・長尾弾正少弼殿にて」

「なんと」

三田弾正は絶句した。

長尾景虎の雷名は、遠く多摩まで鳴り響いている。若年なれど女犯を律し毘沙門天に傾倒する神懸かりな武将、信州川中島にてかの武田信玄と三度対峙し、五分に渡り合つたと不敗の合戦巧者。

「するとこれは、ただの凱旋ではないな」

「如何にも。我が殿は北条掃討の陣触れ相違ないと」

「……おう」

三田弾正は感嘆を漏らした。大石が動くなら連絡を密にしたい、このことを使者に述べると、三田弾正は傍らの重太郎に

「さつそく皆に報せよ」

そういつて弾正は立った。

三田弾正の返事を得たうえで、大石入道道俊は多摩地方の豪族たちへ決起を促す使者を走らせた。秋川筋の小豪族たちは、しかし、即断を躊躇った。兵

が足りぬという理由である。

ようやく重い腰を上げたのは、檜原城主・平山伊賀入道以清齋だった。平山入道は勝沼城に赴き

「挙兵に際し、勝沼衆として加えて頂きたい」

三田弾正に異存はない。

「我らとて心許ない。どうか与力として未熟な儂を助けて下され」

と手を取った。さても心効いたる配慮なりと、平山伊賀入道以清齋はただただ礼を述べたのであった。

このことをきっかけに、多くの小豪族たちが三田もしくは大石の与力として参陣する動きを取った。多西郡の小豪族は連合軍したのである。

このとき多西郡は打倒北条の異常な興奮に包まれていた。

「時、至る瞬間」

誰もがそれを待ち、胸を熱くしていた。

二

越後守護代・長尾景虎。清廉潔白にして正々堂々とした信念を貫く武将。その力の源は、権威と格式を重んじる、私欲を律する処にある。だからそれを破る者は悪であり、その悪を駆逐することは天誅だった。自らを毘沙門天の化身と豪語する景虎は、その生き方を貫いていた。上杉憲政を快く擁護したのも、偏にその信条に従ったゆえである。

上杉憲政は景虎に大いなる感謝を覚えた。將軍・足利義輝に、景虎を我が養子に迎え、関東管領職を譲渡したいと申し出た。

「恐れ多いこと」

と固辞した長尾景虎だが、権威を重んじる者は真実、權威に欲を持つ。

「ならば養父殿を関東へお戻しせねば。そのうえで、諸將に我が姿をお披露目仕らん」

と、関東凱旋の話がまとまった次第である。前関白・近衛前嗣がこの陣に加わったのも、たまたま、現職を放り出して越後に来た、偶然だった。

永祿三年（1560）八月二十九日。

上杉憲政を擁した越後勢八千騎は春日山城を発し

た。既に上野国在地の上杉家譜代重臣は厩橋城に集結していた。

坂東武者は長尾景虎の高名を知っていた。風の噂に聞いていた、かの精強の陣に加わることは栄誉であり、誰もが興奮した。仁科・海野・高坂といった信州佐久の三氏は、武田への叛意を明確に示した。それどころか近隣にも誘う素振りを見せ始めた。

三国山脈を踏破した越後勢は、関東入りの最初の拠点となる沼田城に入城した。

「上野の豪族は厩橋にて関東管領殿を御迎え召します」

と、長野業正からの使いが待っていた。厩橋城は上野国の要衝で、利根川の水利と街道の合する交易の拠点でもある。現在の群馬県庁がその城址と聞けば、合点がいくだろう。

やがて、毘沙門天の一字を染め抜いた軍旗を翻して、越後勢が厩橋城へ入城した。厩橋城本丸大広間には諸将が集う。上座には肌つやのよい上杉憲政、煌びやかな公家装束の近衛前嗣、そして陣羽織を纏った長尾景虎が腰を下ろした。

立ち上がり発した景虎の怒号には覇気が漲り、諸

将は心底圧倒された。

「関東の秩序は上杉にあり。北条などは毘沙門天により天誅されるものなり。皆々心せよ、我は毘沙門天の化身なり。世の秩序を乱す逆徒には、唐天竺までも追いかけて、天に代わり成敗する。よう覚えておかれよ」

景虎の言葉に諸将は圧倒された。更に継がれた言葉に、諸将は興奮した。

「我は小田原へ長駆し逆徒を討ち果たす。そのうえで上杉兵部公の名跡を継いで関東管領となり、皆を導くものである。相続の儀は鎌倉鶴岡八幡宮にて、古式に則り挙行するものなり。坂東の誉れ、武家の都で取り戻さん」

諸将はどよめき、そして喝采が響いた。満足そうに領きながら、景虎は彼らを見回した。北条の脅威を畏れる彼らは、景虎の言葉に陶醉した。不敗の将が関東管領となれば、北条に脅かされる不安も拭われ、関東に秩序が回復される。一同は歓声でそれに応えた。

「皆の心根、毘沙門天の加護を招福するものなり。大義である」

そういつて景虎は静かな所作で合唱した。

一同はそれに倣い合唱で返した。神懸かり的な人心掌握術であるが、坂東武者たちを惹きつけるには充分であった。

長尾景虎。

のちの上杉謙信である。

大石源三氏明は滝山城を掌握すると、ただちに北条姓に復した。今は〈源三氏照〉と名乗る。

長尾景虎の出現は、まさにこのときのことだった。

小田原の指図により、氏照は滝山籠城を決した。

と同時に、甲斐国郡内上野原城の加藤駿河守信邦へ援軍を要請した。援軍要請は武田・今川・北条の三国同盟によるものである。

が。滝山籠城に参じる多西郡の者は少ない。大石・三田に呼応する者が多かったのだ。氏照に従う意思を示したのは、高幡城主・高幡十右衛門、勝楽寺城主・星見豊後入道、村山城主・村山土佐守などの多東の豪族たちだった。

永祿四年二月二三日、北関東の軍勢を糾合した軍

勢七万騎が、ゆるやかに小田原へと進発した。この数字は『松隣夜話』によるものである。また『関八州古戦録』によれば十一万三千騎と誇張された数字になっている。つまりはそれほどの大軍が集結し、怒濤の進撃をした、ということだ。

越後勢は利根川沿いに新田郡金山まで南下、そこで渡河し妻沼・熊谷方面へと進んだ。恐らく北関東の軍勢はこの渡河地点から合流しただろう。そして松山城へと越後勢本隊が行軍し、別働隊は呼応しない諸城を攻めた。別働隊と歩調を合わせたのが、佐竹・里見・結城など北条氏と対立する戦国大名である。

越後勢本隊は松山城で軍勢を整え、ほどなく南下を開始した。大石入道道俊と三田弾正はその動きに歩調を合わせ、多西郡の軍勢を多摩川と平井川の合する二宮城で参集した。そして、多摩川沿いに進軍を開始し、越後勢との連絡を密にしながら、分倍河原で陣を張った。やがて、巨大な軍勢とはためく軍旗の波が北の大地に映った。未だかつてこのような大軍を見たことがないと、大石入道道俊も三田弾正も息を呑んだ。

「多摩の者であるか。出迎え御苦労」

先頭の煌びやかな武将が声をかけた。さぞや名のある越後の侍大将に違いない。

「関東管領様は何処へ」

「そなたらは多摩の棟梁であるか。よし、付いて参られ、案内しよう」

分倍河原へ宿営の陣幕を慌ただしく張る大軍のなか、それらを尻目にふたりは侍大将について行つた。

「上杉兵部殿へ多摩の客人に候」

陣幕のなかにいたのは、長旅の疲れに顔を浮腫ませた上杉憲政であつた。

「管領様」

「おお、大石源左に三田弾正！二人とも老けたなあ、それほど長く関東を留守にしていたのか。ああ、すべては儂が非力ゆえ……」

そういつて、三人は抱き合い大声をあげて泣いた。

三月一三日、越後勢主力は小田原城を包囲した。

このとき北条氏康はすべての支城に籠城を徹底させ、小田原城もそれに徹する采配を揮つた。長駆の軍勢は総じて短期決戦を好む。厭戦の気運が自ずと生じ

るためだ。ましてや長尾景虎がうわさ通りの合戦巧者ならば、なおのこと無理強いして兵を損ねる愚は犯すまい。

小田原城は平城でありながら早雲以来三代に渡り改修を重ねてきた要塞である。籠城されれば攻め落とすことは容易ではない。そのため景虎は数々の挑発を試みた。が、老獪な氏康はこれに乗らなかつた。

小田原の堅固なる縄張りを力で攻め崩すことは不可能だと、景虎は即座に判断した。この攻防の駆引きを、関東の豪族たちは齒痒く思つていた。槍一本の無骨な坂東武者の目には、とても本氣の合戦をしているようには映らない。

さても長尾景虎とは

「評判ばかりの将よ」

と陰口さえ囁く者も現れた。これにはさすがの景虎も閉口した。厭戦気分を蔓延を恐れた景虎は、わざわざ煌びやかな甲冑に身形を整えると、主な武將を本陣に召集した。

多摩の者たちが長尾景虎を直接見たのは、これが初めてであつた。諸將を前に、景虎の怒号は衆人の度肝を抜いた。將たる者は口先だけで兵を動かすこ

とは出来ない。培われた器量で動かすのだ。そして、景虎の言葉には、人を惹きつける力が漲っていた。その言葉に三田弾正は圧倒された。心服させられたといつてよい。背筋に電流が走ったような、そんな感動に打ち震えてさえた。

(惚れた……！)

三田弾正は遙かに年若い景虎に傾倒した。それは死をも賭さぬ理屈なき真心であつた。

結局、小田原城は最後まで景虎の挑発に乗らなかつた。

攻防一ヶ月。先に均衡を解いたのは長尾景虎である。軍勢は鎌倉方面へと移動を開始した。

三

永祿四年（一五六二）閏三月一日、関東管領上杉憲政・前関白近衛前嗣を擁した長尾景虎率いる越後・関東勢は、極楽寺坂を経て鎌倉へと進んだ。

かつては日本史上初の武家の都・鎌倉。享徳の乱ののちは禪を求道する寺社仏閣と漁民農民だけが残された。武士の栄華は、遠い過去の物語に過ぎない。朽ちることなく若宮大路の一の鳥居は由比ヶ浜からの潮風に晒されている。この大鳥居を武家が肅々と行軍していく。荒涼と化した古都の屍が息を吹き返したようだ。

長尾景虎は傍らの長尾越前守政景に目配せをした。彼は小さく頷くと、手勢を率いて行軍列から外れ

「鎌倉中の寺社へ砂金をばらまき、今宵の宿宮に懇願して参れ。あくまでも低姿勢であることを忘れるな。我らは越後勢にあらず、関東管領の御臣兵なり」

佐渡の金山で採掘した金を、景虎は惜しげもなく用いた。

いつの世も寺社は金に目がない。僧とて人の子、我欲の業を決して拭うことは出来ないものだ。材木座・大町・由比ヶ浜を中心とした鎌倉府内の寺社は、快く境内を陣所として提供した。長尾景虎はこのことを

「僧侶の功德なり。皆の者、粗相なき様」と狼藉を戒めた。

多西郡の者たちの陣所は、材木座安養院に宿营地が割り当てられた。境内に咲く見事な躑躅に、彼らは感嘆を漏らした。

「お互い老骨には堪える。今宵くらいは骨休めだわ」と大石入道は笑った。兵たちにも酒と兵糧が支給され、ひさかたぶりの安息に喜びの声が響いた。

長尾景虎が関東管領になれば、もう北条など恐れるに足りず。誰もがそう浮かれていた。

「果たしてそうかのう」

水を差すように、三田弾正は呟いた。

「長尾弾正とて越後の者、ずっと関東に留まる筈などない。一旦越後へ帰国したら、北条は反撃に転じるだろう。のう、大石入道殿は如何する」

「如何とは？」

「滝山の婿じや。我らは北条に逆らった。娘を人質に取られているようなものではないか、大石入道の背負うものは我らより重い」

「どうか御氣遣い無用」

大石入道は迷う素振りもなく胸を張った。

「あいつは滝山城という多摩の拠点だけが欲しいのだ。大石家のことなど歯牙にもかけぬ鬼養子。この

うえは戸倉山城で兵力を蓄え、滝山城へ攻め入るつもりだ。なに、かつての城なれば、不備なんぞすべて承知。造作もないことよ」

「ならば入道殿、檜原の者も加勢しましょう」

そう云ったのは、檜原城主・平山伊賀入道以清斎である。心強い言葉であった。

「三田弾正殿はどうするつもりじゃ？」

平山伊賀入道以清斎の言葉に、三田弾正は嬉々とした口調で

「我らは上杉の臣下、多西郡から北条を追い出してやるまで戦うつもりだわ」

ここまで彼らが上杉に固執するのは、臣下云々の義侠心だけではない。

北条支配地は四公六民の美辞麗句で徴税される。

田畑のない山間部に、その綺麗事は通用しない。厳しい賦役と課税は領民を苦しめてきた。上杉支配の方が、良かった。

「やれやれ、お互い結構な爺いなのに、これでは隠居なんぞ出来まい」

と、平山伊賀入道以清斎は呟いた。

彼方に響く潮騒が、耳に優しい静かな一夜であつ

た。

永祿四年閏三月一六日、この日は関東の豪族たちにとって、生涯忘れることに出来ない日となった。

関東管領就任式

古式に則ったこの儀式の挙行は久しいことだった。歴史的式典に参列する坂東武者どもは、興奮に震えていた。この華やかにして勇壮な式典は、長尾景虎という武将の生真面目さや権威崇拜の精神を具現化した象徴ともいえよう。

式典には前関白・近衛前嗣が臨席している。それだけでも、この式典は一層格式の高いものに昇華するのだ。そしてもう一人、古河公方家の嫡流・足利藤氏が臨席している。いわば関東の秩序そのものの縮図が、この日、鶴岡八幡宮に集約されたといつてよい。

上杉兵部少輔憲政は未練もなく、名跡と関東管領職を長尾景虎に譲渡した。そして諱として己の名から〈政〉の一字を与えたのである。

「関東管領従五位下弾正少弼・上杉政虎」

これが、景虎の新しい名前である。以後、上杉政

虎という名で、物語を進めていく。

新たな関東の盟主の誕生に、坂東武者たちは称賛を以てこれを迎えた。

小田原遠征は関東の豪族にとって、真実、得るものはなかった。上杉政虎のしたことは、権威の再認識をと夢を与えただけだ。それだけのことを示して、政虎は越後への帰国を急いだ。

このとき、北条氏康に応じた武田信玄が佐久方面へ進軍していた。信玄に帰路を閉ざされる前に、政虎は相模から引揚げる必要があった。

その慌ただしさは、むしろ多くの者たちの引き留めを誘う結果に繋がった。三田弾正は上杉憲政を捕まえると

「越後勢の帰路を多西郡付近へ！」
と続けた。

「何故か」

「大石入道のことを想えば、慈悲にござる」

このままでは、北条氏照が報復のため軍事行動を起す。せめて越後勢が滝山城を牽制すれば、多西郡の者たちも安堵するだろう。